

「全唐詩に見える鳥と鴉」～その用法の相違について～

平野 優

《目次》

序	2
第一章 『全唐詩』における「鳥」「鴉」字の用法	3
第一節 「鳥」字の用法	3
1. 典故を持つ表現	3
2. 典故を持たない表現	8
3. 固有名詞等での使用状況	11
第二節 「鴉」字の用法	11
1. 典故を持つ表現	11
2. 典故を持たない表現	13
3. 固有名詞等での使用状況	14
第二章 「鳥」と「鴉」～用法の相違～	15
第一節 相違点のまとめ	15
1. カラスと関わる用法について	15
2. カラスと関わらない用法について	15
3. 押韻について	15
第二節 相違点に対する考察	16
1. 原典・先例による拘束	16
2. 漢字としての成り立ち	18
第三節 まとめ	19
むすび	20

序

現代の日本において、カラスに対して良いイメージが先行する人はおそらく少ないであろう。我々にとってカラスは、おもに死のイメージと結びつく「黒くて不気味な鳥」である。とりわけ群れをなして鳴き騒ぐ姿などは、何か言い知れない不安をかきたてる。また、現代は都会に棲むカラスがゴミをあさったり、時には人を傷つけたりすることもあるため、そのイメージはますます悪化していると言えよう。少し時間をかけて考えれば、童謡「七つの子」のような、暖かくほのぼのとしたイメージも思い起こされるかもしれない。しかしこれも、「黒くて不気味」というイメージを払拭するものではない。

唐代の詩の中にも、「死」やその他諸々の悪いイメージと関連した形でカラスが詠まれていることがある。しかし一方で、そうしたマイナスのイメージを伴わない形でカラスが登場するものも決して少なくない。また、太陽や親孝行などのプラスのイメージと結びついていることすらある。つまり、現代の我々が彼らに対して抱くイメージとは異なり、唐詩の中のカラスは実に多様な姿を持っている。

唐詩を解釈していく上で、この捉え方の差は多少なりとも障害となるだろう。そこで、『全唐詩』における鳥と鴉の認識を明らかにすべく、用法を分析、分類する作業に取りかかった。そして、作業を進めるにつれて、「鳥」と「鴉」の間に、ある顕著な相違が見えてきた。それは「典故を用いるか否か」という点における相違である。すなわち、「鳥」には典故表現が多く、「鴉」には少ないのである。

拙論は、『全唐詩』における「鳥」「鴉」字の使用状況をまとめ、唐代におけるカラス観の概要を知るとともに、そこから見えてきた「鳥」「鴉」の用法の相違について考察を行うものである。

第一章 『全唐詩』における「鳥」「鴉」字の用法

本章では、『全唐詩¹』を「鳥」「鴉」字で検索し、その用法を分析して分類を試みる。できるかぎり用例を挙げるべきだが、千首近い詩を全て紹介することはできない。よって、この章では特に必要と思われる場合以外の引用は避け、各用法の特徴を大まかにまとめて記す²。分類上の留意点は以下の通りである。

『全唐詩』には同じ詩が別々の部分に重複して収められているものがある。その取り扱いについては以下に従った。

① 作者が一致する場合は合わせて一首として扱った。

② 作者が一致しない場合はそれぞれ一首として扱った。

また、典故を含んでいるかどうか等、判断に迷う詩があったが、とりあえず管見によって分類した。一首の中に複数の要素を持つものが何首か認められるが、これについては該当する分類に重複して数えている。それによって総数に占める割合に若干の誤差が出るが、複数の分類にまたがるものは僅かなので、特に問題は無い。

なお、『全唐詩』には「詞」が約390首収められており、その中には「鳥」「鴉」を含むものが合わせて10首見られる。しかし、詩と詞はもとより異なる形式であり、詞における用例も極めて少ないため、拙論では無視することとする。

第一節 「鳥」字の用法

鳥字を含む詩は、全部で712首ある。そのうち、カラスと直接関わる形で含むものが392首、カラスと直接に関わらない形、すなわち、『地名など、固有名詞の一部』『一般名詞の一部』『黒い』という形容詞』として含むものが320首である。以下、その分類を試みる。

1. 典故を持つ表現

ここでは、唐代以前の文献に何らかの典故を持つ表現を見ていく。

① 神話・伝説

ここでは、はっきりとした起源は分からないが、広く信じられて伝えられてきた神話や伝説に関わるものを見ていく。

ア. 太陽の精としての鳥

鳥を太陽の精として見ることは、遅くとも戦国時代から行われていたようである³。概要について知るには、袁珂『中国神話・伝説大事典』（訳：鈴木博）が便利である。また、

『初学記』『芸文類聚』『淵鑑類函』といった類書にも数多くの記載がある。これらをまとめると、太陽と鳥の伝説についての記述はおおむね次の二点に集約できる。

①太陽の中には鳥が棲んでいる。二本足で描かれることもあるが、多くの場合、奇数が陽数であるのにしたがって三足である。

②東の海の果てに大きな扶桑の木があり、その木に十羽の^{じゅう}日鳥が止まっていた。十羽は毎日代わる代わる天空を横切っていたが、堯の時代に十羽が一度に天空に出て、その熱で地上の物を焼いてしまった。堯が弓の名手^{げい}羿に命じてこれを射させたところ、九羽に命中してこれを落とし、地上は元通りになった。

こうした伝説に基づいて、鳥を太陽の化身として詠んだ詩が合わせて102首ある。この数は先に挙げた392首の約26%にあたる。この値は鳥と直接関わるものの中で最も高く、主要な用法であるといえる。

内容別に見てみると、韓偓「蹤跡」（巻六八三）に「東鳥西兎車輪に似て、劫火桑田復た論ぜず。」とあるように、「時の流れを表すもの（ほとんどの場合、月の兎と対をなす）」が29首ある。次いで、沈佺期「早発平昌島」（巻九六）に「陽鳥海樹を出で、雲雁江煙を下る。」とあり、韓愈「遊青龍寺贈崔大補闕」（巻三三九）に「然（＝燃）雲は樹を焼いて火実駢び、金鳥下りて鰱蚪の卵を啄ばむ。」とあるように、「日の出や日没の情景を表すもの」が26首ある。太陽を表す鳥字の用法では、この二点が主要な位置を占めている。

そのほかには、天候の異常を太陽の鳥の異常と結びつけて「苦寒・苦雨・苦熱⁴」を言うものや、太陽の鳥を引き合いに出して「建物や山が高いこと⁵」を言うものに、ある程度のまとまりを見出すことができる。

イ．親孝行な鳥としての鳥

鳥には「反哺」の伝説がある。ここで言う「哺」とは親鳥が雛に餌を与えることである。そして、その恩に報いるため、成長した雛が年老いた親鳥に餌を与えることを「反哺」と言うのである。この「カラス＝親孝行」という見方は、少なくとも後漢の頃まではさかのぼることができる⁶。動物学的にはこうした習性は認められていないようであるが⁷、その根底には、前段の「太陽の鳥」と関わって、「陽の気は仁である。それゆえ太陽の化身たる鳥は慈孝なのである。」とする見方があるようだ⁸。

こうした伝説に基づいて鳥を詠みこんだ詩が10首確認できる。その内容としては、孟郊「遠遊」（巻三七四）に「慈鳥遠く飛ばず、孝子先ず帰るを念ず。」とあるように、詩人自身の孝心を慈鳥に仮託して表現するものが多い。

また、白居易は「阿崔」（巻四五一）の中で「何れの時か能く反哺し、白頭の鳥を供養せん。」と詠じて、自分の子に将来の報恩を期待している。

ちなみに、鳥が親孝行だとは言っても全ての鳥がそうなのではなく、種類によって区別がある。すなわち、嘴の大きい「大觜鳥」は貪欲で反哺せず、嘴の小さい「慈鳥」は慈孝

で反哺する。この区別は、おそらくその顔つきの違いによるものであろう。詩の中にこの認識を示しているのは、元稹と白居易である⁹。

ウ．瑞鳥、神鳥としての鳥

鳥を、天下の隅々に帝徳が及んだときに現れる瑞鳥として、また、天や神仙の使いとして見ることもあったようである。これも「親孝行のカラス」と同様、「太陽の鳥」にその淵源を持つと思われる¹⁰。様々な伝説があるが、この用法を含む詩は6首と比較的少ないため、詩に詠まれているもののみをまとめる。

『墨子』巻五に、「赤鳥珪を銜えて周の岐社に降りて曰く、天は周の文王に命じて殷を討たしめ、国を有せしめん。と。」とある。この伝説に関わる詩が3首あり、うち2首はその伝説を素直に踏まえたものである¹¹。これに対し、李賀は「白虎行」（巻三九四）で「火鳥日暗くして騰雲崩れ、秦皇蒼生の群を虎視す。」と詠じており、特異である。

また、『芸文類聚』巻九十九に「孫氏瑞応図曰く、文王の時、蒼鳥見る。王者孝悌なれば則ち至る。一本に曰く、賢君帝主孝慈を修行し、万姓に被^{あらわ}して殺生を好まざれば則ち来る。」とある。この「蒼鳥」を用いた詩が1首ある¹²。

残りの2首には、「祥鳥」という語彙が登場する¹³。少し解りにくい部分もあるが、「祥」という修辞を加えることで情景の中の鳥を瑞鳥として見ようとしたものであろう。

②六朝以前の詩および楽府題

以下、六朝以前の詩に典故を持つものや楽府題について述べる。なお、アとイについては、明らかにそれと認められるものは1首ずつしかなく、珍しい用法ではあるが、白居易と李商隠という大家による作であるため、紹介しておく。

ア．毛詩

『毛詩』小雅 正月に、「鳥の爰^{ここ}に止まるを瞻^みるに、誰の屋^{おい}に于てせん。」とあり、鳥が富家の屋根に止まることを言う。白居易は「酬夢得貧居詠懷見贈」（巻四五八）の中でこれを逆説的に用いて、「厨冷えて鳥の屋に止まるを留め難く、門は閑にして雀の羅を張るに与うべし」と詠じた。開成四年（八三九）、晩年の作。履道里での生活の質素なさまを表現したのである。

イ．曹操「短歌行」

『文選』巻二十七、魏武帝曹操の「短歌行」に、「月明らかに星稀にして、烏鵲南に飛ぶ。樹を繞ること三匝り、何れの枝にか依るべき。」とある。夜になっても泊まる枝を見つけれない烏鵲に、才能を持ちながら寄る辺を持たない旅人を重ね合わせたものと言われる。李商隠はこれを踏まえた上で「烏鵲」を「飢鳥」に置き換えて、「故駅迎弔故桂府常侍有感」

(巻五四〇)で、「飢鳥樹を翻り晩雞啼き、泣きて秋原を過ぎ馬泥に没す。」と詠じた。大中五年(八五二)、かつて付き従った鄭重(故桂府常侍)の死に際して、自身の行き場の無さに伴う不安を表現したのである。

ウ．阮籍「詠懷詩」

『文選』巻二十三、阮籍の「詠懷詩十七首 五言 其一」に、「孤鴻外野に号び、朔鳥北林に鳴く。」とある。五臣注によれば、この句は、追放された孤独な賢者と朝廷で権力を振るう朝臣を指すという。詩意は別として、この句を踏まえたと思われる詩が2首認められる¹⁴。

エ．樂府題

鳥に関わる樂府については、齋藤功「『鳥夜啼』變遷考」(『学林』巻一)および、同氏「琴曲『鳥夜啼引』考」(『学林』巻一四)、また、川合康三「中国のアルパ～あるいは樂府『鳥夜啼』について～」(『東北大学文学部研究年報』巻三五)などで既に研究がなされている。ここではその概要について、先学の言葉を借りて簡単にまとめる。

「鳥夜啼」とその傍系「鳥棲曲」であるが、これらは、「主に孤閨の嘆き、生離の悲哀を歌う(齋藤)」ものである。また、それらとは別に、「若妻が「鳥夜啼く」ことに夫の赦免あることを知る(齋藤)」という古辞を踏まえたものもある。この二点に加えて、「朝鳴くはずの鳥が夜更けから鳴きたてて恋人たちの逢瀬を中断する(川合)」という用法もある。そのほかには、「楊叛児¹⁵」や「鳥生」「鳥生八九子」¹⁶を踏まえたと思われる用例がある。

これら、樂府に関わる詩は全部で64首ある。ただし、そのうち28首は「夜鳴く鳥」「夜の鳥」に関わるものであり、樂府を意識しないものが含まれる可能性は高い。しかしながら、樂府に関わる表現は全体として複雑で多様である。よって拙論ではより細かい検討は行わない。

③史書、その他

ここでは、歴史書、その他の諸文献に典故を持つものをまとめる。

ア．空虚を好む鳥 — 『春秋左氏伝』

鳥は空虚で人気の無い場所を好む鳥であるとされる。『春秋左伝注疏』巻三十三に、「丙寅晦、齊師夜遁ぐ。師曠曰く、鳥鳥の声樂し。齊師其れ遁ぐ。と。〔注、鳥鳥空營を得。故に樂しきなり。〕〔中略〕叔向晋侯に告げて曰く、城上に鳥有り。齊師其れ遁ぐ。と。」とある。

こうした故事に基づいて、「兵士のいない陣中の鳥」「廢墟に棲みついた鳥」を詠みこん

だ詩が合わせて8首見られる¹⁷。ただ、現実のカラスもかなり人間を警戒するようであるから¹⁸、これらの詩の中には、前述の典故を意識せず、詩人が実際に見た情景を詠んだものもあるかもしれない。

イ. 御史台と鳥 — 『漢書』朱博伝

『漢書』卷八十三薛宣朱博伝に、「其の府中に柏樹^{つら}列ぬ。常に野鳥数千有りて其の上に棲宿し、晨に去りて暮に来る。号して朝夕鳥^いと曰う。」云々という記述がある。朱博伝の記述からはこの故事が朱博をどう評価するものなのかは分かりにくい。ただ、どうやら詩においては、重要なのは朱博の功績よりも、御史台と鳥の結びつきであるらしい。

この故事に基づいて、監察御史や御史台に関わって「台鳥」「柏鳥」「憲鳥」などの語彙を用いた詩が17首見られる¹⁹。

また、御史台の異称として「鳥台」「鳥府」「鳥署」などの語彙を使用することも多かったようである。カラスと直接関わらない用法ではあるが、これを含む詩が20首確認できる²⁰。

ウ. 鳥頭白 — 『論衡』太子丹の伝説

『論衡』卷五に、「燕の太子丹、秦に朝して去るを得ず。秦王に従いて帰るを求むるも、秦王執^{とら}えて之を留^{ちぎ}む。之と誓りて曰く、日をして再び中せしめ、天粟を雨ふらし、鳥をして白頭たらしめ、馬角を生じ、厨門の木象肉足を生ぜば、乃ち帰るを得ん。と。此の時に当たりて、天地之^{たす}を祐け、日再び中を為し、天粟を雨ふらし、鳥頭を白くし、馬角を生じ、厨門の木象肉足を生ず。秦王以^{おもえ}為らく、聖なり。と。乃ち之を帰らしむ。」とある。

有名な故事であり、今でもあり得ないことを言うのに「鳥白馬角」という四字熟語がある。しかし、詩における用例は意外と少なく、5首のみが認められる。そのうち3首²¹は叶うことの無い望みを言い、1首は諦めの中にかすかな希望を言う²²。残りの1首、李商隠「人欲」（卷五三九）は異色で、「天は無私ではない」ということを言うためにこの故事を用いている。

エ. その他 — 『禽経』

典故を持つ表現の最後として、『禽経』に見られる記述について触れておきたい。『禽経』に、「鳥の雄を失うや、雌則ち夜啼く」とあり、「鳥夜啼」とは違った形で夜啼く鳥が現れている。

2. 典故を持たない表現

次に、特に明確な典故を持たない表現について見ていきたい。

①情景の中の一景物としての鳥

ア. 自然の一部としての鳥

明け方や夕暮れの情景に鳥が詠みこまれることがある。それぞれの時間帯を切り取った中で一つの景物として詠まれていることもあるが²³、夜明け前から日の出、夕焼けから日没という時間の移ろいに関わることの方が多い。そして、時間の移ろいの中に鳥を詠む場合²⁴と、鳥の動きによって時間の移ろいを知る場合²⁵とがある。朝夕の情景として鳥を含む詩は、明け方のものが13首²⁶、夕暮れのものが11首見られる²⁷。

また、夜啼く鳥として登場しながらも、「鳥夜啼」や『禽経』と関わっていないように思えるものがある²⁸。結局、夜と関わる鳥を含む詩28首は、楽府、禽経、景物の三つの用法に分類できると言える。

以上の二点とは別に、時間帯や時間の推移と関わらない形で登場する場合もある。それは、主に天候と関わるもので、雪で餌が得られず共食いして悲しく鳴く様子²⁹や、人間同様に暑さに苦しんでいる様子³⁰が描かれていたり、長雨で苦しんでいることだろうと想像されたりしている³¹。

また、杜甫「堂成」（卷二二六）に「飛鳥暫し止まりて数子を^{ひき}将い、語燕頻りに来りて新巢を定む。」とあり、日常的な風景の中に子連れの鳥を詠んでいる点で注目される。

イ. 詩人の情感と結びつく鳥

前段との線引きは難しく、数もさほど多くはないが、時間の移ろいや天候などよりも、詩人の情感と強く結びついた形で鳥が詠まれていることがある。巢に止まっている鳥や夕方になって巢に帰っていく鳥は、帰るべき家の無い旅路の詩人に帰郷の想いを募らせる³²。また、故人に餌を受けていた鳥が未だに餌を待つ様子は、故人への哀惜を呼び起こす³³。

②比喻、諷諭の手段としての鳥

詩人自身を鳥と重ね合わせた詩がある。李賀は「出城」（卷三九二）の中で、「雪下桂花稀に、啼鳥弾ぜられて帰る。」と言い、未だ及第できず、讒言されて帰って行くその身の悲しみを詠んだ。

また、喩えるという点では前段に共通するが、元稹の「大觜鳥」（卷三九六）は、皇帝に取り入って寵を受ける佞臣を貪欲な大觜鳥に喩えて非難するものだと言われる。また、それに対する白居易の和答詩「和大觜鳥」（卷四二五）もこれに準ずると言えよう。そのほかに、鳥を小人に喩えている詩が2首確認できる³⁴。この2首では、「鳥鳶」を小人に喩え、「鷹鷂（タカやハイタカ）」や「鵲橋（カササギが天にかける橋）」と比している。

③民間の信仰・習俗

以下、民間信仰の対象となった鳥とそれに関わる習俗を詠んだ詩について述べるが、信仰や習俗の内容については、澤田瑞穂『中国動物譚』に詳しいので、ここでは簡単に触れるに留める。

ア．舟と鳥、神廟と鳥

江南の地域では、水神の廟に棲みついた鳥は舟行の守り神として信じられていたようである。だから住民はこれをあえて害さず、鳥は人を全く恐れなかった。鳥たちは舟が通りかかると寄ってきて、舟人が飯を丸めたものや肉をほうって与えると、空中でうまく受けて百に一つも失わなかったと言う。こうした習俗が詠みこまれた詩は、8首確認できる³⁵。（ただし、後述する「鴉」字とは異なり、必ず舟と結びついて用いられている。）

また、おそらくこれと関わって、舟の帆柱には鳥をかたどった風見鳥がつけられていたようである。この風見鳥を詠んだ詩は、実際に舟にしたがって飛ぶ鳥よりも多く詠まれており、特に杜甫の夔州時代以降の作に多く見られる³⁶。

風見に関してもう少し触れておくと、長安の霊台には銅製の風見の鳥が設置されていた。この風見は「銅鳥」などと呼ばれ、詩では太宗皇帝、楊師道、李義府、李嶠、盧照鄰といった初唐の詩人に多く詠まれている。こちらは舟行とは関わらないかも知れないが、他に入れるべき方法を思いつかず、同じ風見と関連付ける形で付記した。

イ．祭鳥、事鳥（鳥を祭る、鳥に仕える）

鳥には予知能力や富をもたらす力があると信じられ、巫者の言葉にしたがって供物をし、これを祭るという習俗があった。元稹の「大觜鳥」（巻三九六）や白居易の「和大觜鳥」（巻四二五）には、そのようにして鳥に奉仕する富家の主人が描かれている。先にも述べた通りこれらは諷諭詩であるが、こうした習俗が存在し、この二人の詩人から批判的に見られていたことは確かである。

この習俗がどれほど広く行われていたかについては、同じく元稹の「春分投簡陽明洞天作」（巻四二三）が手がかりになる。この詩には詩人が訪れた陽明洞天（現在の浙江省紹興市郊外）の習俗として祭鳥が挙げられているが、「大觜鳥」「和大觜鳥」が元和五年（八一〇）の作であるのに対して、この詩は太和三年（八二九）の作である。ある時は批判の対象となりつつも、少なくとも元和から太和にわたって存在していた習俗だったらしい。この習俗を詠みこんだ詩は、ここに挙げた3首である。

④死との結びつき

ここでは、「死」のイメージを伴う形で詠まれた鳥について見ておきたい。まず挙げられるのは、戦場で死体を啄ばむ鳥であろう。李白は「戦城南」（巻一七／巻一六七）の中で、

また、こうした「死」のイメージと関わって、墓地と鳥が同時に描かれることがある。鮑溶「悼豆盧策先輩」（巻四八五）に「行きて雞黍を將^もつて祭るも、已に是烏鳶の食らうところなり。」とあるように、鳥は供物を狙う鳥としても捉えられていたようだ。墓地と関わる鳥を詠んだ詩は5首確認できる³⁷。

⑤ 害鳥、悪鳥

杜甫は、主人を失った馬を詠じた「瘦馬行」(巻二一七)の中で、「天寒く遠放雁は伴を為し、日暮れて収められず鳥瘡を啄ばむ。」と、馬の背にできた瘡を啄ばむ鳥を描いた。こうした形で鳥を詩に詠んだのは、おそらく杜甫が最初である。この後には張籍や元稹が続き、この用法を含む詩は3首見られる³⁸。

白居易は、「新樂府 秦吉了 哀冤民也」（巻四二七）の中で、「昨日大爪の鳶、今日大觜の鳥。鳶は乳燕を捎めて一窠覆り、鳥は母雞を啄ばんで双眼枯る。雞号んで地に墮ち燕驚いて去り、然る後卵を拾い其の雛を攫む。」と詠み、燕や鶏に対して暴虐の限りを尽くす鳶や鳥を描いている。もちろんこれは諷諭を目的とした詩であり、実際の情景を描いたわけではないが、鳥は他の鳥に害をなすものとしても捉えられていた。この詩の他には、孟郊「覆巢行」（巻三七二）に、巢が覆って地に落ちた雛を啄ばみに来る鳥鳶が描かれている。

3. 固有名詞等での使用状況

カラスと直接に関わらない鳥字の用法について、簡単にまとめておく。本節の冒頭でも触れたが、この用法を含む詩は合わせて 320 首ある。さらに細かく分けると、固有名詞の一部として含む詩が 95 首あり、烏江、烏程、烏孫、烏衣巷などが多く用いられている。一般名詞として含むものは 125 首あり、烏鵲、風見の鳥（檣鳥や相鳥など）、御史台の異称（烏台、烏府、烏署など）が多い。「黒い」という形容詞としては 100 首が認められるが、そのうち 67 首が、黒い帽子を表す烏帽、烏紗、烏巾などを詠んでいる。

第二節 「鴉」字の用法

鴉字を含む詩は、285首ある。そのうち、カラスと直接関わる形で含むものが245首、カラスと直接関わらない形で含むものが40首である。以下、その分類を試みる。

なお、比較の便宜のため、第一節と同じ配列を用い、鴉字では見られない用法もあえて残しておく。なお、典故等、説明の部分は省くので、第一節を参照していただきたい。

1. 典故を持つ表現

①神話・伝説

ア、太陽の精としての鴉

鴉を太陽の精として捉えている用例は5首であり、非常に少ない³⁹。用法としては、日の出と日没を表すものが主である。押韻のために鴉字を用いているように見えるものも2首あり、太陽を指すカラスには鳥字を用いるのが普通であったことが分かる。

イ. 親孝行な鳥としての鴉

この用法は、杜甫「題桃樹」（巻二二六）に「簾戸毎に宜しく乳燕を通すべし、兒童慈鴉まかを打つを信せる莫れ。」と見えるのみである。これも鴉字が韻字になっており、本来「鳥」であるところを「鴉」に変えているように見える。その使用頻度を百分率で見ると、「鳥」は392首中10首で約2.6%であり、「鴉」は245首中1首で約0.4%である。用例数が少なく、統計的な確実性が低いことは否めないが、押韻のための代用と見て良さそうである。

ウ. 瑞鳥、神鳥としての鴉

鴉字を含む詩にこの用法は見当たらない。

②六朝以前の詩および樂府題

ア. 毛詩

鴉字を含む詩にこの用法は見当たらない。

イ. 曹操「短歌行」

張祐「聴簡上人吹蘆管三首其三」（卷五一）に、「月は江城に落ち樹は鴉を繞らす、一声の蘆管は是天涯。」とある。これも、鴉字は韻字となっている⁴⁰。

ウ. 阮籍「詠懷詩」

鴉字を含む詩にこの用例は見当たらない。

工．樂府題

樂府に関わる可能性のある用例は21首ある。こちらも第一節にしたがって、拙論では深く触れない。ただし、「夜鳴く鴉」「夜の鴉」を含む詩が11首を占めている。

③史書、その他

ア. 空虚を好む鴉 —『春秋左氏伝』

この用例は6首確認できる。ただし、「無人の陣営」を表すものは無く、全てが、温庭筠「題李衛公二首其二」（卷五八三）「画閣開かず梁燕去り、朱門掃かるること罷みて乳鴉還る。」のように、「廢墟に棲みついた鴉」を表している⁴¹。

イ、御史台と鴉 — 『漢書』 朱博伝

この用法は、蘇味道「贈対御史入台」（卷六五）に「夕鴉共に鳴きて舞い、屈草芳菲に接す。」とあるのみである。また、御史台の異称としての用例は無い。

ウ. 烏頭白 — 『論衡』太子丹の伝説

鴉字を含む詩にこの用例は見当たらない。

エ. その他 — 『禽經』

第一節で『禽經』について触れた。鴉字についても夜の景物として鴉が詠まれているものが11首ある。「楽府題」と関わるものを検討する際に考慮する必要がある。

-----●-----●-----●-----●-----●-----●-----●-----●-----●-----●-----●-----●-----●-----

2. 典故を持たない表現

①情景の中の一景物

ア. 自然の一部としての鴉

第二節の1.を読んで、鴉字には典故を持つ表現が非常に少ないことがお分かりだろう。鴉字の用例は、典故を持たない表現、しかも、情景の一景物として詠まれているものが非常に多い。

明け方の情景として詠まれているものが38首、夕方の情景として詠まれているものが77首ある。また、ここに夜の鴉の用法11首(楽府との兼ね合いもあるが、)を加えると、合わせて126例となって全体の半数を超える。明け方と夕方の用例に関して、時間帯を切り取るか、時間の移ろいを表すか、といった表現上の違いは、おおむね鳥と同じと考えてよいと思う。ただ、用例数が非常に多く、鳥の用例に比べて表現の幅が広いため、明確な判断がつかないものもある。また、夜の鴉についても用法上の違いを見ておくと、鳴き声が含まれるものが7首、ねぐらに止まっている様子などで登場するものが4首である。

もちろん、時間帯に関わらずに詠まれているものも多く見られる。何を数に入れるかにもよるが、おおよそ40首ほどはあるだろう。先に挙げた126例と合計すると180例近くになり、全体の約75%近くを占める。その内容は種種雑多であり、突出したものは無い。一つ示せば全て示さなければならなくなるので、ここではその多様性に言及するに留める。

イ. 詩人の情感と結びつく鴉

鳥の用法同様、前段との線引きが難しいところであるが、詩人の情感が顕著に現れているものを例示しておきたいと思う。

韋莊は「夏口行寄婺州諸弟」(巻六九八)の中で、遠く離れた故郷に宛てて、「双双として伴を得ること争でか雁のごとくならん、一一巢に帰ること卻って鴉を羨む」と詠んだ。また、吳融も「閑望」(巻六八四)の中で、帰る家のある鴉を羨んでいる。

②比喻、諷諭の手段

第一節では、李賀が自身を鳥に喩えた詩を挙げた。鴉字では、杜甫に自身を鴉に喩えた詩「遣懷」(巻二二五)があり「夜来帰鳥尽き、啼殺す後棲の鴉。」という。帰るのが遅くなり、泊まる枝が無くなってしまっ^{いか}て啼く鴉と自身を重ね合わせている。秦州時代の作と言われる。

鳥字では元稹、白居易に鳥を佞臣に喩えたものがあつた。鴉字では、儲光羲「羣鴉詠」(巻一三七)に、「群鴉天車に随い、夜は新豊の樹に満つ。思う所は腐餘に在り、復た霜露を憂えず。」と、おこぼれにあずかろうとして皇帝の行幸に付き従う鴉の群れが描かれており、佞臣に喩えていると思われる。

また、珍しいものとして、孟郊「塘下行」（卷三七二）に「是れ城頭の樹にあらず、那ぞ来去の鴉を棲ましめん。」とある。軽佻浮薄で感情が定まらない男を「来去鴉」と表現したのである。

③民間の習俗・信仰

ア．舟と鴉、神廟と鴉

この、舟の鴉、神廟の鴉を詠んだ詩は16首ある。これは245首中の約8%にあたる。鳥は8首で約2%なので、舟行に関わって神聖視されたカラスは鴉字で表すことが多かったようである。内容としては、舟が登場しない場合でも「神鴉」などとして詠まれている点で鳥の用法とは異なる。大きく分けて、舟の上などで人から餌を受ける場面が描かれているものと、「廟」「祠」の周りに棲んでいることが示されているものがあり、後者が多い。

イ．祭鴉、事鴉（鴉を祭る、鴉に仕える）

直接に鴉が登場するわけではないが、この習俗の存在を示す用例がある。『中国動物譚』でも指摘されているところであるが、温庭筠「燒歌」（卷五七七）に、「面を仰いで呻き復たはなひ囃り、鴉娘は豊歳を呪す。」とあり、祭鴉の巫女を「鴉娘」と称したことが分かる。

④死との結びつき

戦場や死体と結びつく鴉を含む詩は4首ある。鳥の用例と内容上の大差は無いが、墓地に関わるものは無い。用例の割合としては鳥より少なく、1首を除いて鴉字が韻字になっている。

⑤害鳥、悪鳥

ア．家畜の背を啄ばむ鴉

鴉字を含む詩にこの用例は見当たらない。

イ．他の鳥に害をなす鴉

鴉字を含む詩にこの用例は見当たらない。

3．固有名詞等での使用状況

カラスと直接に関わらない形で鴉字を含む詩について、第一節同様に簡単にまとめておく。この用法を含む詩は合わせて40首ある。内訳は、固有名詞として含むものが4首、一般名詞として含むものが12首、「黒い」という形容詞として含むものが14首である。また、鳥字には無い用例として、井戸の轆轤や舟の櫂などの音を表す「鴉軋」という疊韻語を含むものが6首、カラス以外の鳥の鳴き声として含むものが2首ある⁴²。

以上、『全唐詩』における鳥字と鴉字の用法についてまとめた。

第二章 「鳥」と「鴉」 ～用法の相違～

本章では、第一章を踏まえて鳥字と鴉字の用法上の相違点をまとめ、考察を加えていく。

第一節 相違点のまとめ

1. カラスと関わる用法について

典故を含む表現を見ると、鳥字には典故表現が多く、鴉字には典故表現が少ない。楽府に関わる問題があるため、正確な数はわからない。しかし、夜の鳥を除いても、鳥字を含む詩で典故を含むものは、392首中250首ほどはある。それに対して鴉字は、多く見積もっても285首中40首ほどである。

また、典故を含まない表現のみに目を向けると、「祭鳥、事鳥」「死」「害鳥、悪鳥」という悪いイメージを伴う用例にも特徴がある。すなわち、鳥字に悪いイメージのものが多く、鴉字には少ない。割合は、鳥の約6.6%（392首中26首）に対し、鴉が1.7%（285首中5首）である。

2. カラスと関わない用法について

第一章、各節の冒頭にも述べたが、鳥字のカラスと関わない用例は712首中320首で約45%であり、鴉字は325首中40首で約14%である。鳥字は鴉字と比べて、カラスと関わないものにも用いられやすく、比喩的な意味を持ったり、象徴性を帯びやすい語だといえる。これに対して鴉字は、カラスそのものを指すことが多く、具象性が高いといえるだろう。

また、鳥字には擬音語としての用法を含むものは無いが、鴉字には8首ある。

3. 押韻について

第一章で、押韻のために鳥字を鴉字で代用している可能性について触れた。もちろん、鳥字が韻字になっている詩もあるのだが、全体として、鴉字が韻字になる場合の方が圧倒的に多いという印象があった。

そこでために、内容は無視して『全唐詩』中⁴³の鳥字、鴉字の数と、それぞれが句末に用いられている数、偶数句末に用いられている数を数えてみた。その結果とそれぞれが全体に占める割合を百分率で表したのが、次に掲げる表である。

	総数	句末 (%)	偶数句末 (%)
鳥	888	76 (8.5)	40 (4.5)
鴉	320	98 (30.6)	77 (24.1)

表を見ると、鳥字よりも鴉字の方が、句末に用いられる割合が非常に高いことが分かる。句末にあるから韻字であるとは必ずしも言えないが、鴉字の方が韻字になり易いことは確実である。そしてこれは、それぞれの字を発音する際の響きとも無関係ではないであろう。つまり、「鳥」は口をすぼめて発音するために余韻が残りにくい、「鴉」は口を大きく開けて発音するため余韻が残りやすい。

この結果から考えると、押韻のために鳥字を鴉字で代用することがあっても、何ら不思議ではない。その逆もあつたかも知れないが、決して多くは無かつたはずである。

第二節 相違点に対する考察

以上の相違点を踏まえて、その原因について考察を行う。

1. 原典・先例による拘束

鳥字の用法に典故を用いた表現が多いことの原因として、典故の原典の表記に鳥字が用いられ、唐代以前の詩文でもそれが踏襲されていることが挙げられる。つまり、唐代の詩人たちが原典や先例の表記を踏襲した結果として、典故を持つ表現に鳥字が多く用いられたのである。

ただし、「踏襲した」とは言っても、詩人たちに「踏襲しない」という選択肢があつたわけではない。なぜなら、鳥字とその意味体系との結びつきは、唐代までの伝統によってすでに確定的なものとなっていたからである。言い換えれば、鳥字を用いれば必然的に典故が想起され、鴉字に同じ典故を付加するには「鴉は鳥である」という変換が必要となるような下地が、唐代までに形成されていたのだ。その意味で、詩人たちは、鳥字に意味体系を付加してきた原典や先例に拘束されていたと言える。

また、必然的に典故を想起させる性格を備えていた鳥字は、そのことが障害となって表現上の制約を受けていたと想像できる。この制約は表現者が受けるものであると同時に、その表現の享受者が受けるものでもあつたであろう。そして、この制約を補う役割を担つたのが鴉字であつたと考えられる。つまり、特別な典故を想起させない鴉字が、余計な、もしくは既成概念的な意味を持たない情景を描写する際に多く用いられたのである。

以下、典故を持つものの中でも特に用例数の多い「太陽の鳥」と、そこから派生した「親孝行の鳥」「瑞鳥としての鳥」を例に、鳥字がその意味体系と結びついた過程を具体的に述べ、その中に鴉字が入り込む余地が無かつたことを確認したい。

太陽の鳥について書いた文献で最も古いものは、おそらく『楚辞』の「天問」である。『楚辞』は戦国時代の成立と言われ、「天問」は屈原が天に対して問いかける形で書いたとされる（ただし、成立の時期や、本当に屈原の作かどうかについては諸説ある）。その第三

段の最後に、「羿焉^{なん}ぞ日^いを弾たる。烏焉ぞ羽を解きたる。」とある。後漢の王逸は、この部分の注に前漢の劉安が編著した『淮南子』を引いて、「堯時、十日並び出でて、草木焦枯す。堯、羿に命じて十日を仰射せしめ、其の九日に中^あつ。日中の九鳥皆死して其の羽翼墮つ。故に其の一日を留むるなり。」と説明した。我々はこの注によってその意味するところを知るが、この注を待つまでもなく、少なくとも「天問」が作られた時点で、この伝説は形を整えていたのである⁴⁴。

また、奇怪な伝説を多く収める『山海經』は、晋の郭璞の注があるため、遅くとも三～四世紀ごろには成立していたことが分かる。その「大荒東經」に、「大荒の中に山有り。名づけて孽搖顙^{げつようきんてい}抵と曰ふ。上に扶木有り、柱きこと三百里。〔中略〕一日方に至り、一日方に出づ。皆鳥を載す。」とある。

以上の『楚辞』『天問』、『淮南子』、『山海經』などの古い文献において、太陽の中にいるカラスは全て鳥字で表記されている。ここから派生した「親孝行」「瑞鳥」と関わるカラスは、その表記を素直に受け継いでいるものと見てよい（脚注7、10参照）。

次に、唐代の詩人たちの表現に大きな影響を与えている『文選』の中に、これらの典故がどのように引用されているかを見ておきたい。巻数を追ってその用例を抜き出し、用法について簡単に付記する。

卷一 班固「白雉詩」

「靈篇を啓いて瑞図を披き、白雉を獲て素鳥^{いた}を效す。」（瑞鳥）

左思「三都賦」

卷四 「蜀都賦一首」

「義和道を峻岐に假り、陽鳥翼を高標^{めぐら}に廻す。」（太陽）

卷五 「吳都賦一首」

「鳥兔を日月に籠め、飛走の棲宿を窮めんことを思ふ。（太陽）」

卷六 「魏都賦一首」

「黒きとして鳥に匪ざるは莫く、三趾にして来儀す。」（瑞鳥、太陽）

卷十九 東哲「補亡詩六首」

「嗷嗷たる林鳥、哺を子に受く。」（親孝行）

卷三十五 張協「七命八首」

「陽鳥之が為に羽を頓り、夸父^{やぶ}之が為に策^{つえ}を投ず。」（太陽）

「苑には九尾の禽を戯れしめ、^{その}囿には三足の鳥を棲ましむ。」（瑞鳥、太陽）

卷三十七 李密「陳情事表一首」

「鳥鳥の私情、願はくは養いを終へんことを乞ふ。」（親孝行）

卷四十八 揚雄「劇秦美新」

「夫の白鳩丹鳥、素魚断蛇の若き、斯に方^{くら}ぶれば^な蔑きがごとし。」（瑞鳥）

卷四十八 班固「典引一首」

「昔姫に素雉、朱鳥、玄拒、黄雉の事有るのみ。」（瑞鳥）

このように、『文選』においても、「太陽」「親孝行」「瑞鳥」のカラスには鳥字が用いられている。しかも、『文選』には、用法のいかんに関わらず、鴉字が一字も含まれていない。

こうした流れに沿う形で、唐代の詩人たちは「太陽」「親孝行」「瑞鳥」と関わるカラスに鳥字を用いたのである。改めて『全唐詩』における用例数を確認すると、太陽・親孝行・瑞鳥と関わる形で鳥字を含む詩は合わせて118首あるが、同様に鴉字を含む詩はわずかに6首しかない。しかも、この6首のうち3首は鴉字が韻字になっており、押韻のための代用と見ることができる。したがって、原典や先例に拘束されることなく鴉字を用いた例は、実質的には3首のみである⁴⁵。

以上によって、典故を用いるにあたって原典や先例の表記が大きな影響力を持ち、鴉字に入り込む余地を与えなかったことは明白である。ここでは太陽の鳥とその派生を例に原典や先例による拘束について述べたが、他の典故表現についても同様に考えてよいであろう。

2. 漢字としての成り立ち

以下は推論になるが、本章第一節の2と3で挙げた相違点に対する答えとして、漢字としての成り立ちがその用法の違いに与えた影響について、考えを示したい。それに先立ち、鳥字と鴉字の漢字としての成り立ちを簡単にまとめておく。

①漢字の成り立ち

「鳥」は、『説文解字』の段注に、「鳥字睛を点じ、鳥則ちせざるは、純黒なるを以って故に其の睛を見ざればなり。」とあるように、「鳥」から目の部分にあたる一画を省いた象形文字である。

「鴉」は、『説文解字』には収められていない。『康熙字典』などによると、もと「雅」に作り、鳴き声を表す音符「牙」に小さい鳥を表す意符「隹」をつけた形声文字である。本来はミヤマガラスを指す字であり、「鷗」や「鴉」はこの字の別体である。これがカラス

の鳴き声をかたどった字であることは、『本草綱目』の注に引く『禽經』（現行本には無い）に、「鵲は啞啞と鳴く。故に之を鵲と謂う。」とあることなどから分かる。

②成り立ちの違いによる用法の違い

この漢字の成り立ちの違いにも、それぞれの用法の違いが現れているのではないか。つまり、「鳥」は、象形文字としての象徴性や記号性のために、カラスを観念的に見る場合、また、カラスから連想される既成の概念を表す場合に用いられ、カラスから離れた意味ですら用いられているように見える。例えば、太陽の鳥をはじめとして神話や伝説を記すときに用いられ、それを典故とする表現でも用いられている。また、カラスから連想される「黒い」という概念と結びついて、形容詞として用いられている。さらには、固有名詞や一般名詞の一部としても用いられることも多い。

一方、カラスの鳴き声を写し取った形成文字である「鴉」は、聴覚と結びつくことによって、生きた鳥としてのカラスを想起させる力を持つ。例えば、幼児が動物を鳴き声によって表現するのと似ているだろう。だから「鴉」は、詩人が実際に聞いた鳴き声や乱れ飛ぶ姿などと結びついて、実際の情景、もしくは実際に見ているかのように思い描いた情景を表現する際に用いられるのではないか。逆に言えば、そうした具象性が典故を想起させる妨げとなり、典故を持つ表現で用いられることが少なかったのかもしれない。

こうして考えてみると、先に挙げた「悪いイメージ」のカラスにおける相違は興味深い。つまり、カラスは悪い鳥だというイメージも、明確な典故こそ見当たらないが結局は観念的なものであり、詩人の実体験とはあまり結びついていなかったと考えられるのである。鴉字における「悪いイメージ」の用例は、5首中3首に押韻のための代用の可能性があるから、それを考えるとこの傾向はもっと顕著になる。

文字学や音韻学の方面からのより詳しい考察については、今後の課題としたい。

第三節 まとめ

最後に、以上を総括して要約的に記しておく。

鳥字は典故を持つ表現で用いられることが多い。これは、様々な伝説や故事の原典での表記が鳥字であるのを踏襲した結果である。逆に、特に典故を持たず、表現上の制約を受けない鴉字は、鳥字と比べて自由な情景描写の中で用いられることが多かった。

また、おそらく発声時の口の形による余韻の残りやすさと関わって、鳥字は韻字になりにくく、鴉字は韻字になりやすい。これによって、本来は鳥字を用いるべき用法で、押韻のために鴉字を用いることがあった。

また、それぞれの字の漢字としての成り立ちが、その用法の違いを生んでいる可能性もある。

以上、鳥字と鴉字の用法上の相違点をまとめ、それに対する考察を加えた。

むすび

以上、『全唐詩』における鳥字、鴉字の用法と、各用法の違いについて述べてきた。用法の概要を示し、鳥と鴉がどのように使い分けられているか、という点に一つの考えを述べることができたと思う。

しかしながら、筆者の力不足と、短期間で千首近くの用例を扱ったことにより、それぞれの詩の解釈は深めることができなかった。したがって、そのことによる分類の不適當や遺漏も数多く残されていることと思う。今後、今回の成果を足がかりにして、それぞれの分類について、より詳細な分析を行う必要があるだろう。また、今回は触れなかったが、用法の分析をしていくうちに見えてきた問題がいくつかある。以下にそれを示して、拙論を締めくくりたい。

本文でも触れたが、樂府と関係のある用法については、深く触れることができなかった。また、今回の分類を、さらに初唐、盛唐、中唐、晩唐の時期区分によって分類してみると、「太陽の化身としての鳥」の用例のうち、半数以上が晩唐に集中していることが分かった。さらに、これは前者二点ほど明確ではないが、鳥字、鴉字ともに中唐においてより多様な表現として用いられているような印象がある。それぞれについて研究を深める余地がある。

最後に、拙論の執筆にあたって、中国文学研究室の諸先生方から多大なご助言とご指導を賜った。そのことに感謝の意を表して、拙論のむすびとしたい。

【注】

-
- ¹ 『全唐詩』のテキストについては、寒泉によった。ただし、詩句を引用する場合には中華書局本で確認した。
- ² 参照すべき詩については〔作者「詩題」(巻数)〕の形で脚注に置く。ただし、詩題を列挙するだけでもかなりの量があるため、全てを挙げることはできない。
- ³ 『楚辞』天問に、「羿焉矰日を弾たる。鳥焉矰羽を解きたる。」と。
- ⁴ 「苦寒」は杜甫「前苦寒行二首其二」(巻二二二)他、「苦雨」は白居易「秋霖即事連句三十韻」(巻七九〇)他、「苦熱」は僧鸞「苦熱行」(巻八二三)他。こうした用法は11首に見られる。
- ⁵ 王季文「九華山謠」(巻六〇〇)他。この用法は5首に見られる。
- ⁶ 許慎『説文解字』に、「鳥は孝鳥なり」と。
- ⁷ カラスやカササギの仲間についての詳細な解説を備えた図鑑、"CROWS AND JAYS" A Guide to the Crows, Jays and Magpies of the World (Steve Madge and Hilary Burn, 1994)には、そうした記述は見当たらない。
- ⁸ 『芸文類聚』巻九十二に、「春秋元命苞曰く、火流れて鳥と為る。鳥は孝鳥なり。何ぞ孝なるを知る。鳥は陽精にして陽天の意なり。鳥、日中に在りて天に従い以って孝を昭らかにするなり。」と。
- ⁹ 元稹「大觜鳥」(巻三九六)、白居易「和大觜鳥」(巻四二五)。
- ¹⁰ 『芸文類聚』巻九十二に、「古今注曰く、所謂赤鳥なる者は朱鳥なり。其の居る所は高く遠く、日中の三足鳥の精降りて生ず。三足鳥何を以って三足なるか。陽数は奇なればなり。是を以って有虞孝至れば三足其の庭に集い、曾参瓜を鋤せば三足其の冠に萃まる。」とあり、太陽の鳥と瑞鳥である赤鳥が結びついている。
- ¹¹ 褚亮「祀園丘樂章」(巻一〇)、竇希玠「奉和九日幸臨渭亭登高應制得明字」(巻一〇四)。
- ¹² 張籍「董公詩」(巻三八三)。
- ¹³ 皇甫冉「奉和独狐中丞遊法華寺」(巻二五〇)、竇叔向「春日早朝應制」(巻二七一)。
- ¹⁴ 韋應物「擬古詩十二首其六」(巻一八六)、柳宗元「感遇二首其一」(巻三五三)。
- ¹⁵ 「暫出白門前、楊柳可藏鳥。飲作沈水香、儂作博山炉」
- ¹⁶ 「鳥生八九子、端坐秦氏桂樹間。昔我秦氏家、有遨遊蕩子。用睢陽彊蘇合彈。」
- ¹⁷ 賀朝「從軍行」(巻一一七)、王建「古宮怨」(巻二九八)他。
- ¹⁸ 筆者の住まいは田地と山に囲まれており、カラスも多い。時に林や墓地など一ヶ所に集まって止まっていることがあるが、近づこうとするとまだかなり距離があっても逃げて行き、離れてしばらくするとまた集まってくる。
- ¹⁹ 盧照鄰「長安古意」(巻四一)他。

-
- ^{2 0} 魏求己「自御史左授山陽丞」(卷四四) 他。
- ^{2 1} 元稹「送致用」(卷四一三) 他。
- ^{2 2} 白居易「潜別離」(卷二六／卷四三五)。
- ^{2 3} 羅隱「衡陽泊木居士廟下作」(卷六五六) 他。
- ^{2 4} 李賀「石城曉」(卷三九二) 他。
- ^{2 5} 顧況「宮詞五首其一」(卷二六七) 他。
- ^{2 6} 王維「早朝」(卷一二六) 他。
- ^{2 7} 杜甫「暮歸」(卷二三二) 他。
- ^{2 8} 張繼「楓橋夜泊」(卷二四二) 他。
- ^{2 9} 孟郊「飢雪吟」(卷三七四)。
- ^{3 0} 韓愈「納涼連句」(卷七九一)。
- ^{3 1} 杜甫「苦雨奉寄隴西公兼呈王徵子」(卷二一六)。
- ^{3 2} 韓愈「食曲河駅」(卷三四一)、袁不約「離家」(卷五〇八)、吳融「登漢城樓」(卷六八六) 他。
- ^{3 3} 張喬「弔造微上人」(卷六三八)。
- ^{3 4} 李涉「岳陽別張祐」(卷四七七)、陸暢「解內人嘲」(卷四七八)。
- ^{3 5} 張祐「送韋整尉長沙」(卷五一〇) 他。
- ^{3 6} 李百藥「渡漢江」(卷四三)、杜甫「遣悶」(卷二三二) 他。
- ^{3 7} 元稹「酬樂天東南行詩一百韻」(卷四〇七) 他。
- ^{3 8} 張籍「牧童詞」(卷三八二)、元稹「當來日大難」(卷二〇／卷四一八)。
- ^{3 9} 韓愈「送惠師」(卷三三七)、盧仝「與馬異結交詩」(卷三八八) 他。
- ^{4 0} 案ずるに、「短歌行」での「烏鵲」はカササギを指すものである。それを烏字で代表させ、さらに押韻のために鴉字に変えている。こうなると本来のカササギとは全くかけ離れてしまい、典故も想起しにくくなる。それをあえてしているのはなぜだろうか。確証は無いが、烏と烏鵲を混同していたのかもしれない。
- ^{4 1} 李商隱「旧頓」(卷五四〇)、張喬「台城」(卷六三九) 他。
- ^{4 2} 張說「時樂鳥篇」(卷八六)、孟郊「濟源寒食」(卷三七六)。
- ^{4 3} 詞は省いた。

-
- ^{4 4} 『淮南子』の現行本にはこれと同じ記述は無い。しかし、「十日並出」については本經訓に見え、精神訓には「日中に踰烏有り。」と見える。この二つを合わせて考えれば、王逸が注に引いた内容と重なる。
- ^{4 5} 韓愈「送恵師」(卷三三七)、聶夷中「住京寄同志」(卷六三六)、無名氏「春二首其一」(卷七八五)の3首が、韻字にならない太陽の鴉を含む。